雜　錄

感情移入說非難概括

深田康算

感情移入說(Einfühlungstheorie)は、私も屢論じた如く、現代の美學界に於ける最も注目すべき而して又最も難解な學說の一つである。英米で最近に現はれた美學上の著書又論文に、表現說とも名づくべき伊太利のクローチェ(B. Croce)の思想を激賞する者が多い樣に、近代の佛國美學界に於てギーヨー(Guyau)やベルグソン(Bergson)の生活感說や神秘說が注目すべき學說である樣に、獨逸の學界では、リップス(Theodor Lipps)に依りて代表せらるる感情移入說が最も重要なる位地を占めて居るやうに思はれる。

他人の心を察したり、異邦の風俗や、過去の事件を理解したりする場合に、吾々自らが身を彼の境遇に置き、心を彼と同化せしめなければ、本當の理解は得られぬと云ふ意味に於ては、感情移入と云ふことは、何人にも承認せられなければならぬ程明瞭な事柄であると云ひ得る。敎師の兒童に對する、裁判官の罪人に對する、歷史家の史實に對する、又小說家の作中人物に對する、皆盡く此意味に於ける感情移入(Einfühlen, einleben)に依つて對者の心理を理解するより外に途はあり得ない。事物の眞の理解は外部から之を眺めることに

依つては得られず、唯其物自分の内面から見る若しくは其中に住むことに依つてのみ始めて得られるに相違ない。尙一歩を進めて云へば、吾々には吾々自分より外は何物をも知ることは出來ぬとも考えられる。今は男でありながら、昔、女であつた時の事を想ひ起し得ると云ふ希臘の話にあるチレジアスの如き通力は吾々に與えられては居らぬ。アナトール・フランスが印象批評を辯護する爲めに述べてゐる如く『まことは、吾々は吾々自分の外には出ない』とも云へる。——是等の考え方若しくは云ひ現はし方に親しみを持つてゐる者は、美學上の一つの學說としての感情移入說に對して、直ちに贊同の意を表したく思ふであらう。如何にして吾々自らが身を他の地位に置くと云ふことが出來るか。吾々は果して吾々自らの中に閉ぢ籠められてゐる事恰も永遠の牢獄の裡に在るが如きものであるか。吾々が最も能く知つてゐるもの、夫れ以外何物をも知り得ぬものとは、果して此吾々自らなのであるか。此種の疑問を發する前に、而して此種の疑問の中に含まれてゐる煩鎖な問題を檢査することなしに、恐らくは多くの人々は感情移入が畢竟眞理でなければならぬと云ふ樣な感じを抱いてしまうであらう。感情移入說に贊同する學者の中には、そう云ふ常識論者、印象主義者、主觀主義者が少なくはない。感情移入と云ふ詞は、斯くの如くにして、可なり曖昧な漠然たる色合を帶び、通俗的に多くの人々に依つて認容せられるやうになつた。而して夫れが又逆に美學の特殊の範圍に影響を及ぼして、學說としての感情移入說に弱からざる聲援を與えて居る。感情移入說が實は極めて難解なる（換言すれば、獨特な考え方を豫想する）學說であるのに拘はらず、其名の甚だ人望ある所以は、恐らく、そう云ふ事情に基くのであらう。

然しながら、夫れと同時に、學說としての感情移入說には深い原理的洞察の含まれてゐることも觀過することは出來ない。(少くとも之れ丈けの事は、リップスの美學第二卷第一章の叙述を讀んだ者に取つては、不當の贊辭とは思はれないであろう)移入說の根本思想は畢竟『內へ向つて登る』(introrsum ascendere)と云ふ神秘論者の標語に合するものと見られるが、其所說を指して、盡く皆修辭上の隱喩に誤まられたるもの、一種の夢想詩であつて學說ではないと非難するのは評家の不十分なる理解に基くものと云はなければならない。其外感情移入說に向つて爲された多くの非難(此中には私自身の試みた二三の批評も數えなければならぬが)に至つては、其或ものは夫々夫れ自ら興味ある問題に觸れてゐるに拘はらず、實は皆感情移入の問題の中心點へまでは突込んで居らなかつたと斷言するのが寧ろ正當であろう。移入せられる感情が實際感情であるか觀念的感情であるかの論、融合と聯想との區別に關する議論、感情移入說は當然獨在論に歸着しなければならぬか否かの問題の如き大部分は盡く其例である。而して非難若しくは批評の或他のものは、リップスの叙述に於ける十分明瞭ならざる部分から起る所のもの、換言すれば、彼の思想の云はば自らなる發展の途上に現出し來るべき將來の問題に關するものである。例へばリップスの所謂『形式的原理』と感情移入の原理との關係の如き、統覺的感情移入(allgemeine apperzeptive Einfühlung)自然への感情移入(Natureinfühlung)及び情趣移入(Stimmungs einfühlung)と狹義の若しくは本來の感情移入との關係の如き、又美的經驗を說明する特種の原理としての感情移入(aesthetische Einfühlung)と、經驗を說明する一般的原理としての夫れ(Einfühlung überhaupt)との關係に就ての疑問の如きは此種の

問題に關するものと云ふべきであらう。

以上假りに三大別した移入說駁論の中第一種に屬するものは、デッソアー(Dessoir)及ラロー(Lalo)の議論である。デッソアーは世馴れた怜悧な人の執る云はば懶げな懷疑の態度に隱れて、移入論者が唯一つの原理を確信し說敎するのを大人氣なき仕業と見、其確信と情熱とを言葉に誤られて起つた迷信に供ふ執着であるかの如くに考えて居る。丁寧な辭禮に包まれてゐる此冷評は、片意地になつてゐる移入論者の或ものを反省せしめる丈けの効能はあるに相違ないが、云ふ迄もなく原理に就ての吾々の知識を一歩でも深くする力は持つて居らない。ラローの非難に至つては、全然感情移入說の眞意を解しないのに基くと評すべきである。舞臺に現はれた敵役に對して眞面目に怒る程我を忘れた觀客は即ち感情移入の狀態にあると云ふ彼の詞は最も能く之れを曝露して居る。感情移入說の云ふ移入が此の如き性質のものでない事は。殆んど斷はる必要もない位に明かな事であらう。ヴォーヴナルグの思想錄に『憐みは悲哀と愛情との結合だ』と云ふ個條に、憐れみの起るのは必しも吾々の身に引き當てる事を要しない、憐みは un sentimentdésintéressé だとある。此場合吾身に引き當てることは、感情移入の狀態ではなくして、傷を見て眼の痛む如くに、直接に不幸に對して吾情の痛むのが却つて其狀態に近かいと云ふべきである。感情移入は屢誤解せられる樣に personal のものではなくして、寧ろ impersonal であると云はなければならぬ。主觀的なるものが主觀を離れて客觀的となること、又逆に客觀的なるものが主觀的となること、其所に感情移入の根本問題が存在してゐるのである。デッソアーとラローとの非難は此問題に對して全然理解を缺いて居ると見られる。少くとも前者は單なる心理學的說

明としてのみ感情移入の原理を見做し、夫故に根本的解決の途は此所に與えられぬと考え、後者は此原理を粗雜に曲解した結果安價な淺い神秘說に過ぎぬものと評價して居る。感情移入の問題の存在する場所と、此問題を解決しやうとする方法の特種の性質とに關する理解の缺如は、彼等を驅つて彼等自身も終には回避することが出來ないであらう所の此根本問題に對して一時的無感覺に陷らしめたと評すべきであろう。デッソアーに取つては移入說は恐らくは未だ十分に神秘的ではなく、ラローに取つては夫れはあまりに神秘的なのである。

第二種に屬するものはギタゼック（Witasek）及びテオドル・マイヤー（Th. A. Meyer）の非難である。感情移入が心理學的な說明の原理と見られるならば（リップスが美學は論理學及び倫理學と同じくつまり心理學であると云つて居るのは、此く見るのを要求してゐる）而して美的觀照の心理を說明し盡くし得るといふ自任を以て居ると見られるならば、此心理的事實と其說明の仕方とに就ての見解の相異の上から、此原理の當否に關する意見が又自ら異り得る。ギタセックやマイヤーの移入說批評に現はれて居る非難——感情移入說が當然假定しなければならぬ所の實際感情說（Aktualitätsansicht）に對する疑問、及び美的觀照の或一部分は移入說に依つて說明せられても、其全部は之れに依つて說明が出來ないと云ふ非難——は卽ち之に基ゐて居る。此論難の中心問題は夫故に觀照の心理的過程の說明問題であつて、感情移入と呼ばれた心理的事實の云はば解剖及生理の問題である。而して此場合聯想か融合かの爭ひは己に其意味を失つて、最も重要なる點は、畢竟感情と觀念（若しくは判斷）との關係に在る。ギタセックの觀念感情說（Vorstellungsansicht）もマイヤーの具

象觀念說（Anschauungstheore）も感情を以て或觀念若くは判斷に（如何に密接にもせよ）附隨するものと見る點に於ては一致して居る。ギタセックかヨナス・コーンの說に對して美を價値と見ることに反對する議論の如き、マイヤーが美的滿足の情は必ずや對象の美的價値に就ての判斷の上に立つと云ふ考の如きは明かに之れを示して居る。カントが『判斷力批判』に於て嚴密な形に云ひ現はした問題の形式を借りて、美的觀照に於ては感情が判斷に先行するか、判斷が感情に先行するかと問ふならば、ギタセックもマイヤーも共に、判斷が感情に先行すると答えるであらう。其所に感情移入論者と是等の學者との意見の背驅が存在する。而して其所に心理學的說明の上に於ける感情と知性との關係若くは地位に就ての根本的相異があり、隨つて心理學に就ての觀念に大なる徑庭が認められる。所謂說明的心理學の立場から云ふならば、知と情とは如何に區分し難く見える場合に於ても何所までも別種類の力として之れを認めなければならない。之れを別種と認めて、區分し難い事實の消えて行く地平線の彼方に於ても、尙其平行する二線を假定し、其相關的地位を確認することが卽ち說明の原理の職分に協ふものとせられる。然らざればそは最早學術的說明の領分外に逸するものとせられる。此く考えて來れば感情移入の原理に對して殆んど總ての方面から懸けられてゐる神秘若しくは修辭的比喩の疑の據つて來る所以を察することが出來やう。多くの學者に取つては心理學は美學と明瞭に區劃せられた學問の一分野であるのに、リップスは此犯かす可らざる領域を塗抹し去るものである。多くの心理學者に取つては、美的感情は美的價値に就ての判斷に附隨するといふ點で規定せられ得るのに反して、リップスから云へば美的價値は卽ち感情移入（若しくは感情的

經驗）に依りて始めて可能なのである。此二重の境界線抹殺と見られるリップスの tour de force は彼を批判する上に於て最も重要な點であると思はれる。其意味と價値とを同情を以て理解ずることがなければ、感情移入說の周りに起る總ての論爭は畢竟問題の中心に觸れることは出來ない。ギタセツクやマイヤーの議論及び其他の論難が夫々興味ある而して必しも無益ではない所の研究であるに拘はらず、リップスの考え方を汲み取る上に於て遂は全然埒外に演ぜられた競技の如き觀を呈するのは之れが爲めである。加之此等の遠心的競技が其努力の强くなるに隨つて如何にしても埒內に入り込み來らなければならぬ形勢を示すことは、感情移入說の勝利を豫想せしめるものであるとも云へやう。

リップスが敢えてした二重の境界線抹殺は一方に於ては美學を抹殺し、他方に於ては美的感情の特殊性を抹殺するものとして、一見美的なるものの限定を不可能ならしめる如くに見えながら、實はそうではない。寧ろ彼の區劃を存置することが却つて此の特殊性を不可能ならしめる所以となるのである。リップスに取つて必然的な此途行を十分に理解する爲めには、吾々は彼の獨特な考え方の中に暫らく身を置かなければならぬ。而して夫れは吾々に取つて極めて困難な仕事であるに相違ない。其思想の變遷の跡が他に類例なき程多角な鋸齒狀を示してゐる點に於て、又其文字と精神との間に存在する極端な不適合が、屢吾々をして精神を捕え難からしめる點に於て、少くともリップスの思想の總ての部分に對して行き亘つた理解を而して其上に尙贊同を與え得ることは、吾々には極めて困難な仕事である。然しながら、ギタセツクやマイヤーが執つて居る說明的心理學の立場が美的なるものの規定に成功し得ぬこと、隨つてリ

ップスが敢てした二重の抹殺に意義のあることを認めるのは左程困難な仕事ではない。說明的心理學の立場から云へば、美的感情は美的價値に就ての判斷に依つて規定せられると云ふ。而して美的價値に就ての判斷が說明的心理學の範圍に全くは收め切れぬと考えられる限りに於て、美學は美の心理學のみではないと云ふ境界線が引かれ得る。夫故に此立場に立つ以上は、何處まで其分析の途を進めても、美的なるものの規定は、其分析の尙一步(而して遂に足を就けることの出來ない一步)先きに在る。感情が美的判斷に附隨した場合、判斷が美的價値に就て下された場合、此等の感情や判斷を美的價値から抽象せられ得るものと見、夫自身に於ては無差別な中性的な心理過程と見做して、そう云ふ感情や判斷の研究が心理學であると考えるならば、一方に於ては感情の心理學に美的なるものの本性を規定し得る力を否定し、他方に於ては心理學から美學を明瞭に區劃するのは當然である。然しながら此の如くにして一步一步分折の先きに追ひやられた『美的なるものの規定』は何處に於て確立せられ得るのかと問はなければならぬ。若し心理學から此の如くにして區劃せられた美學が其根本的規定を與えるものであるとするならば、其規定の仕方は、說明的心理學の固守する原理とは全く趣を異にしたものとならなければならぬ。然らざれば、心理學と區劃された如くに見える美學は、實はやはり、說明的心理學と同じ原理を共有する限り、心理學に外ならぬと云ふ結果に陷らなければならない。ギタセックやマイヤーの考え方は明かに自ら此兩刀法の苦境に落ちなければならぬ運命を持つてゐる。リップスの感情移入說及美學即心理學の說は、此苦境を豫見して之れを切り拔ける爲めの陣立ではないであらうか。之れに反對する論者は遂に其最後の解決に際して

は敵の力を借りなければならぬのではないであらうか。

云ふ迄もなく、上の樣に考えてリップスの荒療治を承認する上は、感情に就ての吾々の見解、心理學に就ての吾々の見解も亦根柢から面目を改めなければならない。知情意が意識の三側面（而かも多くの場合寧ろ三つの能力と云ひ切る方が此種の考え方を忠實に曝露する）であると云ふ如き、心理學は說明學（リップスが說明學と云ふ所のものは、其意味之れと全く同じくないことは斷はる迄もない）であると云ふ如き見地は當然捨てられなければならぬ。尙一步進めて云へば學術的說明に關する吾々の見解が一新せられなければならぬ。ヂルタイ(W. Dilthey)が考えて居る說明と理解（Erklären und Verstehen）との區別及び說明的心理學と記述的心理學（erklärende oder deskriptive Psychologie）との區別の如きは、此問題に對して吾々に敎える所が多いであろう。